

日本宋代文學學會
第10回大会プログラム

2023年5月20日(土) 13:00～17:50

12:20 受付開始

於早稲田大学 小野梓記念講堂

13:00 会長あいさつ 東 英寿

I 研究発表 13:05～14:15

①13:05-13:35 加納 留美子 (相模女子大学)

転生する僧侶 ——蘇軾「僧圓澤傳」考——

司会 原田 愛 (金沢大学)

②13:40-14:10 甲斐 雄一 (明治大学)

村瀬栲亭編『増統陸放翁詩選』について

司会 石本 道明 (國學院大学)

休憩 14:10-14:25

③14:25-14:55 高橋 幸吉 (慶應義塾大学)

宋代の捕蝗詩

司会 三野 豊浩 (愛知大学)

④15:00-15:30 卓 清芬 (国立中央大学)

試析周邦彦《清真詞》的起與結 ——以民國詞人喬大壯、
唐圭璋之說為例

司会 藤原 祐子 (岡山大学)

II 第2回宋代書簡シンポジウム 15:50～17:10

JSPS科研費基盤(B)「宋代書簡に関する総合的研究」主催／
日本宋代文学学会共催

司会 内山 精也 (早稲田大学)

①15:50-16:10 東 英寿 (九州大学)／久保山哲二(学習院大学)

歐陽脩「啓」文体の特色 —歐陽脩四六文と『文選』四六文との比較—

②16:15-16:35 平田 茂樹 (大阪公立大学)

宋代の「啓」の効用 —劉克莊の文集を手掛かりとして—

③16:40-17:00 永田 知之 (京都大学人文科学研究所)

唐・五代の「書儀」と宋代の書簡 —継承と変容をめぐって—

④17:00-17:10 総合討論

III 総会 17:25～17:50

懇親会 18:15～ 於 イル・デ・パン 03-3203-8191
会費 5,000円前後

※ 懇親会参加希望の方は、予約の都合がありますので、5月14日(日)の夜までに
内山 (neishan@waseda.jp) まで、必ずメールしてください。

大会会場……早稲田大学 27号館 B2「小野梓記念講堂」

※ 昨年の日本中国学会でも使用された講堂です。早稲田大学「正門」の向かいに「大隈講堂」があり、「大隈講堂」の、ロータリーを隔てた向かいにあります。添付の地図をご覧ください。

アクセス……添付の地図に手書きで青と黄色の線を引きました。青い線は、JR山手線「高田馬場」駅から、都バス「早大正門」行に乗った場合の経路です。山手線ホームの真ん中辺りから下りていくと改札口があります。改札を出て、右手に進むと、駅舎を出てすぐに「早大正門」行のバス停があります。乗車時間は7、8分です。終点「早大正門」の下車ポイントから横断歩道を渡ると目の前が27号館です。

黄色の線は、東京メトロ「東西線」で「早稲田」駅下車の経路です。「3a」出口から出ていただき、左に折れてください。緩やかな坂を下り切った辺りを左に折れ道なりに進みます。徒歩5、6分で到着します。

発表提要

I-① 転生する僧侶 ——蘇軾「僧圓澤傳」考——

相模女子大学学芸学部 加納 留美子

「僧圓澤傳」は北宋の蘇軾（1037-1101）が杭州時代に撰した作品であり、自注で説くとおおり、杭州の寺僧に贈る目的で唐代伝奇『甘澤謠』「圓觀」を刪削・改変させたものである。

「圓觀」「僧圓澤傳」は細部で異なる点はあるものの、大筋で一致している——唐の時代、李源は安史の乱で父が殺害されたことを契機に、洛陽の恵林寺に隠棲していた。ある日、無二の友である同寺の僧侶圓澤と旅に出たところ、三年間妊娠したままの女性を見かける。すると圓澤は腹の胎児が来世の自分であると告白し、李源に後事を託して死去する。李源は圓澤の死後に誕生した赤子を見て、赤子が本当に圓澤だと確認した。十数年後、李源は圓澤と約束した杭州の天竺寺を訪ねると、牧童となった転生後の圓澤と再会したのだった。

李源は史書に載る実在の人物であり、『甘澤謠』以外の唐代伝奇にも登場している。一方で、圓澤（圓觀）は本作以外に登場せず、一切が不明である。管見の限り、「仏教を奉じる僧侶が転生を拒否する」という矛盾を孕んだモチーフは本作の他には確認できず、「圓觀」「僧圓澤傳」を語る上で不可欠な特徴だと言えよう。ただし二作品の間で、この矛盾したモチーフの扱われ方には差異がある。すなわち、蘇軾は刪削する中で意図的に手を加えた箇所が見られるのである。

本発表では、原作「圓觀」と照らし合わせつつ、蘇軾がどのような改変を施したのか、またそれが如何なる意図に基づく改変なのかを考察する。あわせて、その改変が齎した作品内外への影響を指摘する。さらに「僧圓澤傳」以外の作品にも目を向け、蘇軾が長年にわたって繰り返し提示した「転生する僧侶」のイメージの形成過程についても論じたい。

I-② 村瀬栲亭編『増続陸放翁詩選』について

明治大学文学部 甲斐 雄一

陸游詩の選集『名公妙選陸放翁詩集』は元代に編まれているが（前集十巻は羅椅、後集八巻は劉辰翁の撰）、日本にはその元版系統のテキストが現存している。それと比較すると、中国の明版系統には後世の書肆の手が加わっていることなど、元版系統のテキストについては、筆者がかつて論じたことがある（『名公妙選陸放翁詩集』に

について」、「『名公妙選陸放翁詩集』所収の陸游詩について」。この選集に増補を加えたのが、江戸時代の儒者である村瀬栲亭（1744-1818）による『増続陸放翁詩選』である。単なる増補ではなく、もともと前後集十八巻であったものを組み替えて七巻にしていること、詩僧である六如の作業を栲亭が受け継ぎ、六如が『唐宋詩醇』に拠ったのに対し、栲亭は別集『劔南詩稿』から選出したことが栲亭の序文に記されている。本発表では、栲亭による編集、増補の作業について調査し、日本での陸游詩受容について考えてみたい。

I-③ 宋代の捕蝗詩

慶應義塾大学商学部 高橋 幸吉

蝗害は飢饉を引き起こし、中国歴代王朝の荒廃に関わる災害であった。そのため蝗（バッタ）に言及する詩は無数に存在する。しかし蝗の駆除である“捕蝗”について言及した詩は多くは無く、“捕蝗”とは上表文や制誥などの散文中に現れる語である。これを詩題とした作品は白居易を嚆矢とし、宋代に入って幾つかの作品が作られるようになる。本発表では宋代における捕蝗詩を概観しながら、蝗の駆除について具体的な描写をしている例として鄭獬・章甫・戴栩らの詩を取り上げる。“捕蝗”というものの蝗害一般に触れるもの、民衆の視点から蝗害とその駆除の困難を描写するもの、駆除よりもこれに伴う官吏の横暴を問題にするものなど様々な観点から詩が作られている。そしてその中でも重要だと思われる、歐陽脩「朱棗の「捕蝗詩」に答ふ」を考察し、詩人たちの捕蝗に対する態度や社会的背景について考えてみたい。

I-④ 試析周邦彦《清真詞》的起與結 ——以民國詞人喬大壯、唐圭璋之說為例

国立中央大学中文系 卓 清 芬

北宋詞人周邦彦(1056-1121)的《清真詞》，章法細密，詞筆渾成，極受晚清民國的詞家推崇，有「集大成」之稱。民國詞人重視詞的創作，多以詞作示例，逐句解析，以示金針。

喬大壯(1892-1948)曾手批周邦彦《片玉集》，逐首圈點眉批，唐圭璋《唐宋詞簡釋》選周邦彦十六首，詳盡剖析章句內涵。喬大壯、唐圭璋為南京如社中人，論詞多闡揚晚清「重」「拙」「大」之旨，為晚清過渡到民國詞學的橋樑。《清真詞》的起與結，頗受諸家稱道，本文以《清真詞》中二人評語為例，以觀察《清真詞》的獨到之處。

第2回 宋代書簡シンポジウム

Ⅱ-① 歐陽脩「啓」文体の特色 ——歐陽脩四六文と『文選』四六文との比較——

九州大学大学院比較社会文化研究院 東 英寿
学習院大学大学院人文科学研究科 久保山 哲二

歐陽脩は、唐宋八大家の一人であり宋代の古文の復興に力を尽くした古文の大家として知られているので、古文の対極に位置すると言われる文体である四六文は作成していないかのような錯覚に陥るかも知れないが、実は歐陽脩の全集である『歐陽文忠公集』百五十三巻には大量に四六文の作が残っている。たとえば、『歐陽文忠公集』に収録されている『奏議集』十巻、『表奏書啓四六集』七巻、『内制集』八巻、『外制集』三巻等に収録の作品は、いずれも四六文の形式の文章である。

本発表では、『表奏書啓四六集』に収録されている四六文の書簡である五十四篇の「啓」の文体に着目して、同じく四六文でありその全盛時に編纂された『文選』収録の書簡の文体と比較を行うこと等を通して、歐陽脩の啓の文体の持つ特色を浮かび上がらせたい。さらに、歐陽脩の四六文は『文選』の四六文とどのような違いがあるのかという視点から、歐陽脩四六文の特色について明らかにしたい。

Ⅱ-② 宋代の「啓」の効用 ——劉克莊の文集を手掛かりとして——

大阪公立大学大学院文学研究科 平田 茂樹

宋代の書信には「書」「啓」「状」「劄子」「帖」「簡」「尺牘」など各種の様式がある。現在『全宋文』には35000を超す書信が残されているが、そのうち「書」と「啓」がそれぞれ14000前後を占めており、両系統の書信の数が圧倒的に多い。「書」は公私両方の機能を有しているが、一方の「啓」には誕生日の祝いに対する返礼なども多くみられるが、ほとんどが赴任、昇任、推薦などに関わる挨拶や謝礼が多く、官僚世界の交遊のあり方をよく表してくれる。

本報告では劉克莊の文集に数多く残されている「啓」を題材としながら、以下のことを示す。(1)「啓」の様式。劉克莊の「啓」を読み進めていくと、現在のテンプレートのような同形式の「啓」が頻出する。その実態を指摘するとともに、「啓」の書き方について実例を用いて提示する。(2)「啓」の送り先より見られる官界での交遊のあり方と官僚制度との関係。「啓」の送り先を見ると、宋代の官僚が官界の慣行（あるいは官僚制度）に従い行動している様子が看取される。その実態の一端を提示する。(3) 劉克莊の「啓」より見える宋代政治像。南宋人が北宋の慶曆、嘉祐、元祐などの政治に対して愛慕の気持ちを有するとともに、北宋の「進奏院獄」や「烏台

詩案」などの文字の獄について批判的な見解を共有していたと言われている。劉克莊の「啓」を一事例として南宋人の意識を提示する。

II-③ 唐・五代の「書儀」と宋代の書簡 ——継承と変容をめぐって——

京都大学人文科学研究所 永田 知之

中国の古典文学において、書簡は情報伝達の主たる手段なだけに、特に多くの人々が身近に感じる文体だったと考えられる。その構成や用語は時代で変化しつつ、魏晋南北朝時代を経て、定型化の方向に向かう。幅広い階層の需要に応じてか、文例集も多く作られたが、唐・五代の「書儀」が含む範例は殊に名高い。これら「書儀」の現物が敦煌文献の中から発見されて後、それらや書跡、正倉院文書などを資料に用いて書簡の定型を扱う論著が数多く世に出ている。

ただ五代までに数十種は著された、「(書)儀」を書名に含む例が多い)この種の文献は北宋に入ると司馬光『司馬氏書儀』を例外として、跡を絶つことになる。そもそも「書儀」は礼法の指南書であって、それが書簡の範例を含むのは、手紙は発信者・受信者の上下関係に則って書かねばならず、用途も多く冠婚葬祭に関係するためだった。書簡の文例集がこれ以降も数多く編まれながら、「書儀」が姿を消す背景には、唐・五代に通行した礼法、ひいては文化を乗り越えたいという宋人の思いが存在したのではないか。本発表では「書儀」に関わる資料を示しながら、それらと宋代の書簡との間での継承と変容の様相を見てみたい。

以上